



「生育」と「くさる」の共存へ

小宮山 洋夫

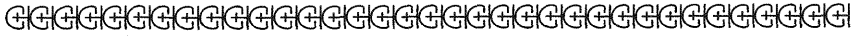
森の中では、様々な樹木が葉を落としている。地表に堆積した落ち葉は、ミミズ、ムカデ、ハサミムシなどの小動物やバクテリアによって、食べられ、分解され、形を失っていく。けれども消失したわけではない。無機化し、土と化し、原初の世界へ戻っていく。

そして、再び、植物の根によって吸収され、茎、

枝、葉、花など、形あるものに変身していく。

この形を失う分解過程は、「くさる」といいかえてもよいだろう。「くさる」とは、形を失い、安定した無機的世界へ還っていくことだ。

落ち葉と違って、水分の多い野菜の実など強い匂いを発する嫌気性の「腐敗」はまさに「くさる」そのものだが、形を失う「分解過程」に包含される。



る。

刈り取られたり、枯死した草は、畦道や原っぱの草を含め、森の落ち葉や、取り残された野菜とともに「くさる」ことで、原初の状態に復帰して、土となり、肥料となる。そして、畑を豊かにして、次代の生命の生育はぐくむ。

畑の中では、野菜や草が生育するとともに、「くさって」いく。「生育」と「くさる」が、共時的に共存している。それが健康で永続的な畑の姿なのだ。私たちは畑の草を、「雑草」と呼んではならない。

「雑草」の呼称の起源は、さほど古くはないだろう。それは、近代、自由と平等の理念のもとに、人間の平均像が形成され、そこから外れた者に対する差別の誕生と、時をともにしているにちがいない。害虫、益虫の分類の虚しさを、すでに、ファールブル



メヒシバ (左)
エノコログサ (右)

は指摘している。

徹底的な除草は、畑から「くさる」過程を追放するものだ。そこには、ただ、「生育」≡「生産」だけが、熱病のように、追求される。

「くさる」が消えた畑には、他の場所で工業的につくられた化学肥料が投入される。そのような畑では、「循環」が切断されている。ただ、直線的に、ひたすら前へ突き進んでいく。「死」が、「生」にながっていない。

